

2012年10月1日。1冊の本をザックに放り込んで穂高へ向かった。一人の編集者との会話がきっかけで、数日前に購入した本だった。編集者との会話は、生き残ったものが背負う呵責(あしやく)とでもいったような内容だった。

もちろん、そんな深刻なテーマに会話を続けていたわけではない。来年出版予定の翻訳本や編集者の会社から発行されている雑誌の連載原稿の打ち合わせをしていた。そんななかで、本当に、ふとした話の流れで出てきた話題の一つが「生き残ったものの呵責」といったものだった。その会話が、震災以降、再読したいと思っていた1冊の本を私に思い出させた。初めて読んだのは高校生のとき



やまもと たろう
山本 太郎

の奥にひっそりと並んでいた。場所はよく覚えていた。夕日がカーテン越しに差し込んでいた。時間の流れが断ち切られたような空間だった。「ためらわずに言うことができると、いい人は帰ってこなかった」という著者の言葉は長く覚えていた。ただ、その後再読した記憶もない。それ以外の記憶はすでに曖昧となっていた。そのときに感じた幾つかの情動を除いて。

「夜と霧」と

だった。何年生の時だったかは覚えていない。田舎の高校の3階建ての校舎の1階の利用する者もない図書館。放課後の短い時間を、時々そこで過ごした。その本はそんな図書館

電車の中、山小屋と再読した。一言ひとことが心に染み付いた。収容中のアウシュビッツからバイエルン地方にある収容所に向かう護送車から見たザルツブルクの

山並みは夕焼けに映えて美しくあったという。「現実には生に終止符を打たれた人間だったのにーあるいはだからこそー何年ものあいだ目にできなかった美しい自然に魅了された」

本を閉じて外を見た。空は高く澄み、青い空に数片の雲が浮かんでいた。

1冊の本とは、ヴィクトール・フランクルの「夜と霧(新版 池田香代子訳 みず書房)」。偶然にも、編集者が勤める出版社から出されたものだった。

その日は夜半から雪になった。朝目覚めると、外は一面の雪だった。2ヶ月ほど積もった雪で奥穂高は白く覆われた。

(長崎大学熱帯医学研究所教授)